

間の船上生活を、余儀なくされた。

帰郷一回目の正月を、船で迎えたのも、生涯忘れ得ぬ体験となったのである。

小学生の終戦

東京都 平山 純子

私が台北市立幸小学校第二学年の夏、第二次世界大戦が終りました。

小学校に入学したのは、昭和十九年の四月でした。母に手をひかれ入学式に出席した時の思い出は、今もあざやかに胸にきざまれております。まず、第一に、学校の門に揚げられた大きな日の丸の旗が春の暖かい風に吹かれ、小さな音をたてて私たちの入学を喜んでるようでした。

式場で、山本校長先生が「立派な日本人となり、お国のために役立つようになるように」とおっしゃった言葉の深い意味は十分理解できませんでしたが、先生

方が、私達に何か望んでいらっしやるようだとは、強く感じました。そのあとで受け持ちの先生の紹介があつて、いろいろと教えていただき、毎日の通学が何よりも楽しくなりました。

二年生になって間もなく、幼児のいる家庭の疎開の命令が下り、台北第三高女に勤めていた母の教え子の家にお世話になることになり母、弟妹三人、従姉と私の六人で移らせていただいたのは、昭和二十年の二月であつたと思います。

疎開地の三峽は、空襲は受けなかつたけれども、台北空襲の米軍機が上空を通過するため、学校は授業休止、退避ということが多くなり、授業ができるという希望はついに叶わなかつた。

二十年六月二十一日、まだ二歳にならない妹の佳子があつた風邪がもとで、たった一晚のわずらいで、疎開病院で急逝し、母と私たち姉妹は悲しみの底に沈んでしまいました。

疎開していた陳家の中学生の坊やが、終戦の日から私たちに熱心に台湾語を教えようとしていることに気

がつきました。そのわけは、これから日本人は、ひどい目にあうと思うから、台湾語を覚えて台湾人のふりをして暮らせば大丈夫じゃないかと考え、私達兄弟姉妹に台湾語を教えようとしたとわかり、胸が痛くなるほど感謝し、言葉にもあらわせないほど有難く思ったのでした。小学校にもあがっていない弟は、いくつかの台湾語を覚え、道で行きあう台湾の人から「この子の顔は日本人だけど、言葉は台湾人みたい」と怪しまれるほどでした。

私たちは、三峡の方がたの誠心からのお世話をうけて十月まで滞在、台北に帰りました。私は再び幸小学校に通学することになりました。

十月の幸小学校の校舎や校庭の樹は昨年の四月頃と同じでした。しかし、今まで経験したことのない淋しいような、冷たいような感じがありました。

いつも、あんなに美しく飾られていた日の丸、天長節の式典の時に校長先生が拝読された教育勅語や天皇皇后両陛下のご真影をはじめ、今日まで大切にされていた数々のものやことがらを今後は排除されることに

なつたと知らされました。

時間の経過と共に私達の教科課程にも変化が起こりました。第一に、私たちは今までは日本語で勉強してきまされたのに、これからは北京語で勉強することになりました。もちろん、私個人としては、北京語に興味を持って勉強しましたが、全体としては大変なことでした。

続けて、使用していた教科書の特定部所を墨を塗ることになりました。

このような情況の中にあつた小学校の先生方は、私の一年生時代とは全く変化し、昔のような親切な態度が少なくなりました。又、私たち生徒も、幸小学校が、前のように落ちついて勉強する気持になる環境ではないように思いました。

妹の佳子が病死して以来、私は、人間の死について考えるようになりました。又その当時、台北にいない父の生死につき不安な日が続きました。ところが、思ひもよらない有難いことが起きました。仏印ハノイ市にいた中華民国軍の劉陸軍大佐が、台南駐屯軍司令官

としてハノイから台南に移駐される時、ハノイにいた父が記された親展書を、土屋宅まで届けてくださったのです。父の親書を読み、初めて父の無事であることがわかり、家族一同安心することが出来ました。しかし、生活の方は、父の帰国が遅れば安心できませんでした。その頃、道路に衣類や家具等を並べて生活の資を工面する姿が見られました。父の帰台の日がわからないため、五人の生活費もいつまでも安心していられなくなりました。

その時、父が出発前に設立発起人の一人として開業した高砂鉛筆台湾工場で製作した鉛筆の在庫品を全島に向けて販売することになったので、その卸商を引き受け、新聞の全島誌に広告を大々的に出して、販売し、これで父の帰宅、日本への引揚げがおくられても、生活の心配だけはなくなりました。

高砂鉛筆の販売に励み、生活の安定が確実になりほつとした時、留守家族は第一船で帰国させるというので、その日のうちに手続きを完了して数日後、家の中は、ちょっと外出する時の状態のまま、私たちは基隆

港から帰国の途につきました。持ち帰り品は、身辺の衣類三点ずつと一人千円でした。

我が家の戦中戦後奮闘記

沖繩県 大浜 基子

太平洋戦争が勃発した年、私は当時の女学校四年生だった。私は台湾の台北州基隆市に生まれ育ち、母や妹二人の家族に囲まれ、しあわせに暮っていた。

昭和十七年三月、女学校を卒業した後、四月には、台湾総督府立台北第一師範学校本科女子部に進学したが、翌年の半ば頃から防空訓練、射撃訓練等が授業に代って多くなると共に、学徒勤労動員として、市街各地の警備にあたることもあった。その頃、大雨の中を台湾総督府前の広場で学徒隊の閲兵行進に参加したことは忘れられない。

戦争も中盤に入った昭和十九年三月、私は無事に師範学校を卒業することができ、母校の基隆市々立双葉